

明治期における箏曲および長唄の記譜法——五線譜の影響を軸に——

衣笠詠子(東京藝術大学大学院)

本研究は、箏曲および長唄の現行の記譜法が、明治期における西洋音楽の流入に伴い導入された五線譜の影響を背景として成立したものであることに着目し、伝承において果たしてきた役割と意義を明らかにするものである。

江戸期にも楽譜は多様に出版されていたが、箏曲および長唄の伝承は、その成立の由来から師弟間の口授・口伝を中核としており、当道制度や組織の内部で曲や伝承経路が厳格に管理されていたことは記録からも明らかである。

記譜に対する意識が大きく変容したのは、西洋音楽が導入された明治期であるといえ、特に1879(明治12)年に文部省内に設置された音楽取調掛では、国家的事業として邦楽曲の調査研究のため五線譜化が進められた。それは民間にも波及し、その成果として五線譜による楽譜が刊行された。しかし現在箏曲および長唄の伝承において主に用いられているのは五線譜ではなく、その影響を受けて成立した独自の記譜法である。

本研究では、この背景を踏まえ、まずは文献により江戸期の伝承構造を明らかにしたうえで、明治期における音楽取調掛と、井上才蔵、田中正平らによる民間での五線譜化事業と独自に考案された記譜法の成立を分析した。その結果、五線譜は演奏の写実的記録として、独自譜は口伝の内容を可視化するものとして成立したことが明らかとなった。

五線譜化の流れを受け、現行の記譜法の基礎となったと考えられる村田松泉および吉住小十郎による独自の記譜法を取り上げ、一次資料の精査を通し、その構造と意義を検討した。結果、独自譜は従来の中伝という文化活動を補い支える記譜構造を有することが確認できた。さらに楽譜受容の過程と現代の伝承の実態を検討するため、聞き取り調査を通し、楽譜が口伝の代替ではなく、師の教えを理解するための媒介として機能していることを明らかにした。

箏曲および長唄の記譜法は、五線譜化に携わった考案者によって西洋音楽の知見を基に成立し、口伝を基盤とする伝承を補助しながらその本質を保持・伝達する役割を担ってきたこと、さらに伝承の在りようそのものを可視化する機能を有すると結論づけた。